

Jorge Luis Borges

EL ALEPH

1949, 1952

目 次

- 不死の人……9
- 死 人……37
- 神学者たち……47
- 戦士と囚われの女の物語……63
- タデオ・イシドロ・クルスの生涯（一八二九—一八七四）……71
- エンマ・ツンツ……77
- アステリオーンの家……87
- もう一つの死……93
- ドイツ鎮魂曲……105
- アヴェロエスの探求……117
- ザーヒル……133

神の書跡…… 149

アベンハカン・エル・ボハリ、おのが迷宮に死す。…… 159

二人の王と二つの迷宮…… 175

待ち受け…… 177

門口の男…… 185

アレフ…… 195

エピローグ…… 223

*

解説(内田兆史)…… 227

不死の人

ソロモンは言う、地上に新しいものは無い。それゆえプラトンは思っていたが、すべて知識は追憶にほかならない。ゆえにソロモンも自説を述べる、すべて新奇のものは忘却にほかならない。

フランシス・ベーコン『随想録』LVIII

一九二九年は六月初旬のロンドンで、スミルナの古籍商ヨセフ・カルタフィルスはルサンジュ公女に、小型四つ折版で六卷（一七二五—一七二〇）のポープの『イリアッド』をお薦めした。公女はお買い上げになり、受け渡しの折に彼と言葉を交された。お話によれば、彼はやつれて土気色の肌をしていた。眼が灰色で口ひげも灰色、表情が妙にはつきりしなかった。いい加減なものだが数か国語を自在に操った。ごく短い時間のあいだに、フランス語から英語に、英語からサロニカのスペイン語とマカオのポルトガル語の混交する謎めいた言葉に移った。十月になり、公女はゼウス号の船客の一人から、カ

ルタファイルスがスミルナへ帰る船旅の途中で亡くなり、イオス島に埋葬されたとお聞きになった。そして『イリアッド』の最後の巻でこの手稿を見つけられた。

原文は英語で書かれ、小難しいラテン語由来の辞句が頻出する。われわれの以下の翻訳は逐語的なものである。

I

記憶するかぎり、わたしの試練は、ディオクレティアヌスが皇帝であったころだが、^{ヘカトンヒュロス}百門の大都ターバイのさる園庭で始まった。(榮譽とは無縁ながら)わたしは最近の数次のエジプト戦役に赴いて、紅海にのぞむベレニケに駐屯中の軍団の司令官に成り上がっていた。みずから望んで剣を取る多くの者が熱病と呪術で倒れた。マウレタニア人らは撃破された。それまで反徒らの都市が占めていた土地は、冥界の神々に永遠に捧げられた。アレクサンドリアも攻略され、^{カエサル}副帝の慈悲を乞うたが虚しかった。一年を経ないで全軍団が勝報をもたらしたが、わたしは軍神マルテの顔を瞥見することさえ叶わなかった。この不足が苦になり、おそらくそれが理由で、わたしは恐ろしい広漠とした荒野を

往く、隠された（不死の人々の都）の発見という難事に挑んだのである。

右に述べたとおり、わたしの試練はターバイのさる園庭で始まった。その夜のわたしは一睡もできなかった。心中ひそかに蠢くものがあったからだ。わたしは夜の明け切らぬうちに、起き上がった。わたしの奴隷たちは眠り続けており、月は無量の砂とおなじ色をしていた。疲れ果て、血にまみれた騎馬の男が東のかたから現われた。男はわたしの数歩さきで落馬した。渴きに苦しむ弱々しい声だがラテン語で、城壁を洗っている川の名前を尋ねた。天水あまみずによつて養われるアイギュプトスである、とわたしは答えた。自分の探し求める川は別のもの、人間どもから死の穢れけがを祓う川である、と彼は切なげな声で応じた。どす黒い血がその胸から流れていた。彼は、郷里はガンジス川を越えた山深いところであり、その一带に流布する噂によれば、西のかたに向かい、地の果てるところまで往く者は、流れが不死を授ける川に達すると言われている、と語った。そしてその対岸には、砦や円形劇場や神殿の夥しくある（不死の人々の都）が建っている、と付け加えた。明るくなる前に彼は息絶えたが、わたしは都とその川を発見したいと思った。死刑係に尋問されて、若干のマウレタニアの捕虜が旅人の話を請け合つた。ある者は、地の果てに在つて人間どもの生が久遠のものである、仙境を思い起こした。またある者

は、パクトーロス川の源流があり、その住民らは一世紀を生きるといふ高山地帯を思い出した。わたしはローマに赴いて、哲学者らと話をしたが、人間どもの生を引き延ばすのはその苦悩を引き延ばし、その死の数を増やすだけであると、彼らは感じていた。かつて自分が〈不死の人々の都〉の存在を信じたかどうか、今のわたしには分からない。當時はその都を探求することで十分であったのだと考える。ガエトウリアの総督のフラウイウスがこの事業のために二百名の兵士を融通してくれた。わたし自身も傭兵を募ったが、この手合い、道に詳しいなどと自慢しながら、まっさきに逃亡を図った。

その後のさまざまな出来事で、われわれの旅の最初の日々の記憶は、どうにもならぬほど歪められてしまった。われわれはアルシノエから進発し、焼けただれた砂漠に踏み入った。蛇をくらい、言葉の遣り取りを知らないトログロデウタエ人たちの土地を越えていった。女どもを共有し、ライオンを食するガラマンテ人たちの土地や、タルタロスのみを崇めるアウギラ人たちの土地などを越えていった。さらに別の砂漠をいくつも渡った。そこでは砂が黒かった。そこではまた、旅人は夜になるのを待って進まなければならなかった。日中の暑さが耐え難かったからである。わたしははるか彼方に、大海にその名を授けた山脈を望み見た。その斜面には、毒を消すという灯台草が茂っている。

そして頂上には、残忍かつ粗暴で、淫欲に耽りがちな種族であるサチュロスたちが住んでいる。大地が怪物を産んでいる、そうした野蛮な地域がその奥に名の聞こえた都を秘めているというのは、われわれ一同にとつても信じ難いことであつた。しかしわれわれは先に進むことにした。ここで退いては恥になるだろうと思つたのである。数名の大胆な者が月光に顔をさらして眠り、熱に浮かされた。水槽の腐敗した水を飲んだ他の者たちは、狂気と死に陥つた。そしてこの時から脱走が始まり、間をおかずに反乱が生じた。鎮圧に当たつて、わたしは躊躇せず^{ちゆうちよ}に苛酷な手段を執つた。厳正に処分したはずだが、一人の百卒長がわたしに警告して、(兵士らの一人の磔刑^{たくけい}への復讐^{ふくせう}を熱望する)反徒らがこのわたしの殺害を企んでいると言つた。忠実であるごく少数の部下とともに、わたしは幕舎から逃れた。激しい砂あらしと果てしない闇の砂漠のなかで、わたしは部下たちとはぐれた。クレタ人の放つた矢がわたしを貫いた。数日さ迷つたが水は得られなかつた。いやあれは、陽射しによつて、渴きによつて、渴きへの恐れによつて数を増した、長ながしい、ただの一日であつたのかも。わたしは愛馬の足の向くままに進んだ。明け方、遠方にピラミッドや塔が倒立しているのが見えた。小さいが鮮明な迷宮を夢に見て、遣り切れない気分^{みづがめ}に陥つた。その中心に水甕が置かれていたのである。わたしの手はそ

れに触れそうだし、わたしの眼はそれを見ているが、迷路の曲折がいかにも複雑で困惑せざるをえないものなので、わたしには分かっていた、それに手を掛ける前に息絶えるだろうということが。

II

ようやくあの悪夢から逃れたと思つたら、わたしは、ある山の急峻な斜面に浅く掘られた、そこらの墓ほどの大きさの、縦長の洞窟に、両手を縛られた状態で転がされていた。側壁は人間の営みよりはむしろ時間に磨かれ、湿気を帯びていた。わたしは鼓動のたびに痛みを胸に感じ、激しい渇きを喉に覚えた。わたしは外に顔を出して、弱々しいが叫び声を上げた。土砂に堰かれがちで音を立てない、濁った細流が山裾に延びていた。そして対岸に、紛れもない（不死の人々の都）が（夕日もしくは朝日を浴びて）光り輝いていた。城壁、アーチ、正面^{フアサイド}、広場をわたしは見た。その基礎は石の台地だった。わたしのものに似ているが、百ほどの形の不ぞろいな石窟が山や谷に穿たれていた。砂原にあまり深くない豎穴が多数あった。そしてこの貧相な穴（と例の石窟）から、肌がねずみ